

園番号 710

令和5年度 奈良市立高円こども園 研究実践概要

園長名 織田 由起子
全園児数 106名

1. 研究主題

『『おもしろい』『またやりたい』と心動かし、意欲的に遊ぶ子どもを目指して』
～豊かな経験ができる魅力的な環境を探る～

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

日々の遊びの中で継続が難しく、満足感や達成感を十分感じられていない子どもの姿が見られる。子どもが豊かな経験を得るためには、子ども一人一人の実態を把握し、様々な遊びを通して「おもしろい」「またやりたい」という子どもの意欲を引き出し、継続して遊び込める環境構成を考えていくことが大切であると考え、研究主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

園生活が心も体も育つ“豊かな経験の場”となるよう、もの・ひと・ことなどの環境を子どもの成長や発達過程、興味・関心に合わせて工夫しながら、生き生きと意欲的に遊ぶことができるような環境を探っていく。

②研究の重点

・職員間での情報共有や、園内研修での学び合いを通して、子ども一人一人の発達や経験、遊びの中での興味関心などを共通理解し、“子ども理解”を深めることで、実践に繋げていく。

・子どもの実態や保育者の願いをもとに保育環境を工夫し、遊びの中で充実感や満足感を十分に感じたり、成功体験を積み重ねたりして「おもしろい」「またやりたい」と思える魅力的な環境づくりに取り組んでいく。

③活動の方法

事例の中の下線は、

_____ : 子どもの実態 _____ : 保育者の意図・工夫 _____ : その後の子どもの姿 とする。

【0歳児】 「どんな感じ？」 9月

プレイルームにウォータークッションを設置した当初は、近づいて座っているだけだったが、慣れてくると上に乗ったりハイハイしたり、歩いたりして、床とは違う感触を味わうようになった。また、中に入っているリボンやビーズを目で追い、手を伸ばして触ろうとしたり、表面をパンパンと叩いて跳ね返ってくる水の感触を楽しんだりしていた。手や足の裏だけでなく、全身で水の感触を感じてほしくて「波ができるよ」と保育者がウォータークッションの端から水を押すと、小さな波ができ、座っている子どもの体がフワッと浮き上がったようになった。不思議な感触にきょとんとした表情を見せていたが、繰り返すうちに「ウワァ」「パッパッパ」と手を叩きながら声を出し、笑顔で楽しん



でいた。

〈考察〉

水の中にリボンやビーズを入れることでその動きに興味をもって目で追い、保育者が表面を叩いたり押したりする姿を見て、好んで上に乗るようになった。保育者との応答的な関わりの中で、体が浮くような楽しい経験をし、ウォータークッションの感触や冷たさを感じ、座った時、上を歩いた時、表面を叩いた時などの感触を体全体で感じる事ができたと考えられる。

【1 歳児】 「コロコロ～！まってー！」 11 月

進級当初から、室内遊びの中で子ども達は丸型の積み木や布製のボールなどを転がして遊ぶ姿があった。そこで、手づくりの“転がすおもちゃ”を用意し、子ども達と一緒にいろいろな物を転がす面白さを感じながら“転がす遊び”をたっぷりと楽しんできた。中庭では、築山での遊びが大好きで登ったり、ゆっくり下りたりおしりで滑ったりして遊ぶことを楽しんでいた。そんな中で保育者がフープを1つ築山の斜面を利用して転がしてみた。すると、すぐに目を輝かせ「まって～」と転がるフープを追いかけて、自分でも“転がしてみたい！”と、それぞれがフープを手にとり、上手く築山の下や遠くまで転がっていった時には、築山の下で見ている子ども達も一緒に「まて、まて～！」とフープを追いかけて、みんなで何度も楽しんだ。



〈考察〉

室内遊びの中で子ども達が興味をもった転がし遊びから、いろいろな“転がす遊び”の環境づくりをし、子ども達と一緒に楽しんできた。その経験から戸外でも転がし遊びを楽しめるよう、築山でのフープ転がしを取り入れた。フープを片手に持って登ったり、フープを追いかけて斜面を下りたり、築山の下で転がってくるのを楽しみに待って追いかけてりと、それぞれが繰り返し楽しんだ。子ども達の好きな転がす遊びを戸外でも取り入れたことで、何度も楽しむ姿、全身を十分動かして遊ぶ姿に繋がったと考えられる。

【2 歳児】 「(寒天が)ゼリーみたい！」 8 月

水や砂などの感触遊びを楽しむ子ども達の姿から、もっといろいろな感触に触れる経験をして欲しいと思い寒天を使った感触遊びを取り入れた。まずは大きなタライの中で両手で握ったり、ちぎったり、混ぜたりして「つめたーい！」「気持ちいい！」と存分に感触を楽しんだ。「ゼリーみたい！」というつぶやきから、皿やクリアカップ、スプーン等を用意すると、寒天をカップに入れ見立て遊びが始まった。子どもの見立てに共感しながら保育者も一緒に楽しむことで「ぶどう味です。どうぞ」等、やりとりする姿にもつながった。最後まで存分に感触を楽しむ子、見立てや、やりとりを楽しむ子等、一人一人が存分に自分のしたいことを楽しむことができた。



〈考察〉

保育者が一緒に遊ぶ中で、子ども達の興味や関心、つぶやきを大切にし、何を楽しんでいるのかをしっかりと見取り、場や用具を整えながら繰り返し何度も楽しんだ。その中で、自分のしたいことを存分に楽しみ、満足感を得ることに繋がった。このような経験が、今後意欲的に継続して遊ぶことができる力にも繋がってくると考えるので大切に積み重ねていきたい。

【3 歳児】 「ダンスやってみよう」 10～11 月

砂場で遊ぶことが好きな子どもが多く、季節にあった環境を整えながら継続して遊ん

できた。保育者は、様々な遊びに興味をもってほしいと思っていたが、子ども達の視野に入りにくいことが気になっていた。そこで、ダンスコーナーが目につきやすい場所に、ごちそうづくりの机を配置した。すると、ダンスコーナーで踊っていた子ども達は、疲れると「ジュース下さい」と友達がつくっていたごちそうを食べて休憩し、ダンスに戻るなど、コーナーの枠を越えて遊ぶ姿が見られるようになった。また、ごちそうづくりをしていた子ども達は、チラチラと友達が楽しそうに踊る姿を見始めた。少しずつ、保育者や友達と一緒にマラカスで応援したり、保育者に誘われて一緒に踊ってみたりすることを繰り返す内に、やってみみたい気持ちが高まり「ぼくもやる」と保育者に見守られながら、音楽に合わせて踊ってみる姿に繋がり、自分なりの表現を楽しんでいた。

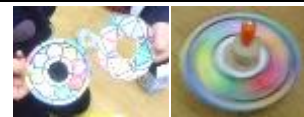


〈考察〉

環境づくりとして、子ども達が他の遊びの面白さにも気付けるように、机の配置を変えたり、場の設定を工夫したりしたことで、お互いの遊びが目につきやすくなり、興味をもって遊んでみようとする姿に繋がった。また、保育者や気の合う友達と一緒に遊ぶことに楽しさを感じる時期であることから、保育者が一緒になって遊び、安心して遊べる雰囲気づくりをしたり、子どもの様子をよく見て遊びだしやすいよう誘いかけたりしたことで、遊びの幅や興味が広がった。

【4 歳児】 「色が変わった！」 1 月

生活発表会のご褒美で糸引きごまをもらったが、回せずすぐに諦めてしまったり、1 回すれば終わったりして、こまの面白さを感じられずにいた。どの子も「やってみたい」という思いで遊べるよう、曼荼羅塗り絵の中心に穴を開け、こまの上に乗せて回すことができる“しかけ”を用意した。早速色を塗り、こまに乗せて回してみると、「にじいろになった」と塗り絵が回ることで模様ができたり、色が混ざって見えたりする様子に釘付けになっていた。そんな友達の様子に刺激を受けて「塗り絵を乗せて回したい」と、回せるようになるまで何度も挑戦していた。回せるようになった喜びや、浮かび上がる模様への興味から繰り返し遊ぶようになり「さっきと色が違う」と気付いたり「2 つ塗って両方回してみよう」と工夫したりして遊ぶ姿が見られた。また「誰が一番長く回るかな」「お散歩できるよ」と友達と一緒に遊びながら、こまそのものの面白さを楽しむ姿にも繋がった。



〈考察〉

こま回しに挑戦してみようと思えるように、色水遊びで混色に興味をもった様子に合わせて、試してみたいと思ったら手軽に取り組みやすい塗り絵の“しかけ”を用意した。加えて「難しいなあ」と気持ちに共感したり、糸を巻くコツをさり気なく知らせたりして関わったことで、初めは続かなかった子どもも「面白いから、何回も回してみよう」「回したいから、何度もチャレンジしてみよう」という姿に繋がったと思う。また、友達と同じ場所でこま回しができるように場を整えたことで一緒に遊び、その楽しさを共有したり、刺激し合える友達がいたことで、遊びが継続し、こま遊びそのものの面白さも味わえたのだと思う。

【5 歳児】 「見て、きれいな色でしょう？」 5～7 月

園庭での草花をつかって色水遊びが始まる。A 児がつくる色水は濁っており、納得のいかない様子であった。A 児は「きれいな色水をつくりたい」と強い思いをもっているが、些細なことで諦めやすい。「できた！」という喜びと成功体験をしてほしいと願い、一緒につくりながらさりげなくきれいに澄んだ色水をつくれるヒントを知らせていった。また、つくりたい気持ちがすぐに実行できるよう比較的容易に色が出やすい花びらを豊富に用意し、毎日繰り返すうちに少しずつきれいに澄んだ色水ができるようになった。話し合いの場で友達に見せ、つけた花びらやつくる時に気を付けたことなどを知らせ

る事が増えた。できた色水を混ぜ、どんな色になるかを試し始め、さらに、自分がつくりたい色水につかえる花を探しに行ったり、予測した色水をつくれるよう、水の量を加減したりすることで納得するまで試していた。



〈考察〉

A児はきれいな色水ができないことで、諦めたり落ち込んだり、時には悲しむ日もあった。「頑張ったらできた」という喜びと自信をもってほしく、道具や材料の精査と見直し、遊び場の検討と同時に、A児の悔しい思いと、その気持ちと同等にある「できるようになりたい」の思いが折れないように側で見守り、些細な頑張りや成功を一つ一つ認めて共に喜んだ。また、できた色水を見せ、認めてもらったこともA児の小さな前進と自信に繋がった。

【長時間】 「今日は何をして遊ぶかな」 12月

長時間保育で「今日は部屋で遊びたかったな」「外で遊びたい」などとつぶやき、遊び始めに時間がかかる姿があった。室内と戸外、どちらで遊びたい子の思いも実現できるように、“カプラの部屋”と“製作遊びの部屋”、“園庭”の3か所から自由に自分のしたい遊びを選べる環境を設定した。また、遊び場所を示したボードを用意したり、各遊び場所に必ず保育者がいるようにしたりしたことで、自分で選んだ場所で安心して遊び始められるようになった。そして、自分のしたい遊びを楽しむ中で、異年齢での関わりも増えた。保育者が異年齢での関わりを見守りつつさり気なく声掛けをしたり、どの年齢にも分かりやすいルールを一緒に考えたりすると、学年を越えて遊びが広がっていった。



〈考察〉

子どもの慣れ親しんだ遊びを中心に、自分で遊びを選べる環境を整えた。ボードで視覚表示を行ったことで、遊びの種類や友達のいる場所が一目で分かり、自分のしたい遊びを選ぶ手助けとなり、安心して存分に遊び込むことができた。子どもの興味関心に合わせた環境と、保育者のゆったりとした見守りや関わりが、子ども達が自ら遊ぶ姿に繋がったと考えられる。それに伴い、異年齢での関わりも多く見られるようになった。自分のしたい遊びを存分に楽しんだ充実感が、異年齢の友達や遊びに目を向けることに繋がった。

5. 研究の成果

遊びの継続が難しい実態があり、遊びの中で満足感や達成感をより感じることで「もっとやってみよう」「こんなふうにしてみたいな」と遊びが継続すると考え、環境や援助をどのようにすれば意欲に繋がるのか常に意識し、取り組んだ。

乳児では、一人一人の発達を把握し、どんな力を付けたいのか、生活と遊びの繋がりを大切にした。また、安心できる保育者との応答的な関わりがあったからこそ、何度も繰り返し楽しむ姿に繋がり、子どもの成長や発達を促すことができた。

幼児では、子どもの実態を丁寧に見取り、興味や関心に沿った環境づくりや、援助を行ったことで、成功体験に繋がり、自分なりに考えたり試したり、目標を持って取り組んだりする姿に繋がってきている。

6. 今後の課題

遊びの継続のためには、子どもの実態に即した環境と援助が大切であることがわかった。今後、更に意欲的に遊ぶ子どもを目指して、乳児期からの発達の連続性を意識していきたいと考える。そのために、園内研修や毎月のカリキュラム会議の中で、その時々々の姿や課題を学年の垣根を越えて共有し、援助や環境を具体的に探していきたい。そして、主体的に遊ぶ子どもの育成に少しずつ繋げていきたい。